

<b>Title</b>	人生に対する態度
<b>Author(s)</b>	牟田, 隆郎
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢,20(2) : 229-242
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=44">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=44</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 人生に対する態度

— 大学生と高齢者の比較 —

牟 田 隆 郎

A View of One's Own Life

- Comparison Between Undergraduate Students and The Aged -

Takao MUTA

---

**Key words:** Human Life, Identity, Self, Self Image, Thanks

### マイ・ライフ

日暮れて道遠し。これは私が10代後半の高校生の頃、クラスの担任の数学教師が、授業中に皆の前で板書した言葉である（「史記」）。この表現を目にした時、反撥するでもなく、私の心の中に「そうだな」とふっと同意の思いがわきあがった記憶がある。

当時、私たちはいや私は、進学競争の波に飲まれていた。焦燥感というほどのものではないが、どんよりとした無力感に近い空気に包まれていた。望むものと現実との乖離。遙か遠くにある目標にひき比べ、今のこの自分の立つ足場は何と不確かなことだろう。焦りのあまり何かやろうと手をつけてみても、しっかりした確実な手応えがあるわけでもない。自分が前に進んでいるのかどうか、覚束なさばかりが気持の中に残っていた。

強い劣等感にさいなまれ、しかしそれを他人に覺られないようにする空しさ。平静を装いつつも、ひとに自分の心の中を見透かされているのではないかという不安。このような心持ちでいれば、ひとと心を許し合える関係を保つのは難しいことになる。ひとと一緒に居なければ落ち着かないくせに、どこか心を解放できないもどかしさ。自らの傷つきを避けるために、知らずセンサーを敏感にはたらかせている自分。用心深く、しかし順調にコトが運んでいるふりをし、どこか平気を装っている自分。

かつての自分を振り返ると、以上のようなことがあった。自分でありつつも今の自分とは異なるかつての自分。今と昔、そこに繋がるものは確かにあるのだが、何と心持ちの違うことであろうか。

星霜を重ねるとはこういうことなのだろうか。40年以上もの年月が、私をかなり変えてしまったようだ。

けれども、日暮れて道遠し。この感慨はふと思えば、今の私にもぴったり当てはまる場所がある。いったいこの40何年間、高校生だった頃以来、私は何をしてきたのだろう。それは一種の軽い失望感とでもいうのか、あるいは空虚感とでもいうのか。それともひとつひとつの事柄が、そのリアルさを減じて、カスとかオリのような、いわば実態を薄めたものとして残っているだけなのか。

自分の「人生」への姿勢は、いつの時にも変わらないところもあれば、その年代、その時の生き様、置かれた状況などによって趣きを異にする。これは「人生」というよりも「自分」というものの在り方が、変わらずどこか繋がっているという面と、局面や事態、時間の推移によって変わっていくという面とを合わせもっていることと関係するのであろう。変わりつつ変わらない。存在とは、人間とは面白いものである。

### 同一性・安定性

ここで少々まわり道になるかもしれないが、「自分」というものの確立やその意義や危うさについて確認しておこう。

さてこの「変わりつつ変わらない」のうちの「変わらない」は、「同一性」の保持という風に捉えることもできる。「自分システム」（「自分」をひとつのシステムと考える）を一定に保つこと、あるいは自己概念を安定的に抱き続けられること。これは生き物というか人間にとって、世を生き抜いていく上で大切なことであろう。しかしこのことを結論とするにはまだ吟味が足りない。なぜ「同一性・安定性」が人間にとって、人間が生きていくということにとって大切なのであろうか。

次々と変身・変形していく存在のかたちというものがあるかもしれないが、例えばウィルスや細菌などは、少しずつ型を変えて生き？ 続けている面もある。人間が作り出した抗ウィルス剤や抗菌剤に対応して、彼ら？ は新しい構造へとメタモルフォーゼする。彼らの在り方の中に、変異することができるような、ある種の柔軟性もともと備わっているわけである。

もちろん人間においても、変わっていくという側面が備わっているのは自明のことである。早いのはしが、生誕から死に至るまで、加齢に伴う心身の変形はかなりのものである。肌の輝きひとつとっても、赤ちゃんのそれと高齢者のそれとは、仮に大いに手入れを施していたにしても、格段の相違がそこにある。

確かに外形・外面的な部分は、人間においてかなりの変化を被ることは免れ得ない。しかしここで問題になるのは、形態・形質的な面ではなく、むしろ内的・内面的な人の在り方についてであろう。「同一性・安定性」、自分が自分であるということ、そして自己概念が一貫しているということが、どうして大事なのかということである。

この点は、人間というものの在り方のもつかなり重要な面と関連すると思われる。すなわち、私たち人間のその生存上の戦略としての「自分というものの構築」がそこにあると思われるからである。ややこしい言い方をしたかもしれないが、「自分イメージ」を抱く、「自己概念」を作るということが、生き抜く上で大きなプラスの役割を果たしていると考えられるからである。

合わせて、この「自分」「自分イメージ」「自己概念」といったものを、生存上の糧とすることのもつリスク面も考慮しなければ片手落ちというものであろう。このことについては後で触れる。

## 生物と秩序

そもそも、「自分」「自己」あるいは「自我」などという側面をもっているのは、人間だけであろう。高等猿類などの中には、「自分イメージ」にやや近いものをもっているものもいておかしくないが、それは人間ほどの多彩で複雑なものではないと思われる。

動植物たちは、つまり人間以外の生き物たちは、その内に組み込まれている遺伝子（とその組み合わせ）によって、その生き方のほとんどをプログラムされている。そしてその遺伝子をベースに、それぞれの種・個体は、生命システムを作り上げ、生を営んでいる。そこにおいて、システムとしての「同一性・安定性」は欠くことのできないものになっている。

言い方を変えれば、熱力学で言うエントロピーを減少させてまで、生命システムの恒常性維持を計っている。無秩序の方向に流れていく存在の運命の中で、生物に限っては、敢て秩序を保つことを試みている感さえある。

このエントロピーを減少させ、秩序を獲得し維持しようとする生物の在り方は、そのまま私たち人間存在にも当てはまる。やはり同一性や安定性追求が、そこにいやでも伴っているからである。

## 「自分」戦略

生き物の一種であるということから、人間も同一性・安定性を基盤に生を営んでいるということは分かった。しかしこれだけでは、先に「自分という戦略」と述べたことの説明としては不十分であろう。確かに一個の生体・生き物という意味では、人間もひとまとまりの生命システムを営んでいる。生き物として同一性・安定性を求め維持し生存を追及している点では、人間も何ら他の生物と異なるところはない。

しかし「自分」を作る、「自分イメージ」を抱く、あるいは「自己概念」を獲得するということには、他の生物よりも遙かに多数の神経細胞が動員されている。そしてそのことにも関わるが、人間は豊かな言語を操ることができる能力、豊かなイメージを浮かべることのできる能力に恵まれていることを忘れてはならない。ここに人間だけが、精緻な「自分システム」を作り上げられる特権をもつ

ことになる。

そして、いわば自己言及的な認知・認識能力、ないしはメタ認知能力を駆使することにより、私たち人間は、「自分」という意識化された存在実体的なものを抱くことが可能になる。この「自分」をもってして、世を生き抜いていく上での手がかりや基地とするのである。己れの身体を、まわりの世界を、この両者の関係するところのものを、それぞれ「自分」を中心に据えて組織化するのである。

ここにおいて人間は、少なくとも二重の同一性・安定性志向システムを保持することになる。つまり、ひとつには生物としてのひとまとまりであるところの「生命システム」を有するということ。もうひとつには、「自分イメージシステム」あるいは「自分概念システム」とでも言うべき意識化可能な自分システムを有するということである（すべてを意識化できるわけではない）。

### 生きやすさをもたらす「自分」

生物にとっての中心的な課題とは、恐らく「個の生存」と「種の持続」であろう。人間においてもこの「個の生存」とその延長上にある「種の持続」は、その生において基本的な側面を為しているものと思われる。さて、「同一性・安定性」というものは、特に「生存」の面において大事な要素であろう。同一性・安定性があることにより、やはり生存のチャンスは高まると思われるからである。

生命システムの面のみならず自分システムの面においても、同一性・安定性があることは、やはり人間にとって重要であろう。自らが一定の在り方をとっていることにより、まわりの環境・状況を、一定のパースペクティブでもって把握することがしやすくなる。さらにそこに意味づけ・価値づけをするならば、なおのこと、環境・状況の自らにとっての適否が明らかになってくる。

自らとまわりとが無数の関係を経ていく中、各人において、片や自分システムが出来上り、片や世界システムが確立していく。この両者は密接不離の関係にある。当然この両者のあり方・関係は、ひとりひとり独自の色彩を色濃くもつものである。

とはいえ、各々の人のもつ「自分・パーソナリティ」やその人の「世界」が、他の人とまるで違うというわけでもない。なぜならば人とは、出生以降莫大な他者との関係を積み重ねている。そして言語能力に裏打ちされた高度な認識能力を獲得したことにより、「他者」「社会」「規範」や、さらに「自由」「責任」「権利」等々の抽象化され半ば実体化された概念・思想をかなり共有し、他の人との集合体を作り上げているからである。

他者への想像力を巡らし、共同存在感覚を共有しつつ、複雑かつ広般な規模をもつ諸社会を構成している。そして、この諸種の社会や共同体に所属するというのが、また各人を生きやすくさせることに繋がっている。

簡単に言えば、社会で生きることにより、ひとりの力では及ばないことを、他者の力を借りることで果たすことがかなり可能になる。そして連帯感を感じることができていれば、良い意味で拡張した自我を有することが出来、従って生きる上での心強さを手に入れることができる。このことは勿論、自らを安定・安心させ、ひいては自らを生きやすくさせてくれる。

この際、各人が集い、社会なり共同体なりを作っていくという面だけでなく、社会や共同体がまずあって、そのただ中に個人が生み落とされるという面も、当然考えなければならない（こちらの場合の方が実はほとんどであるが）。

後者の場合自らの「分」、つまり自分を皆の中で形成していくということが、大きな課題となろう（アイデンティティの確立）。その時、幾らか自立した、幾らか独立した感を抱ける「自分」というものを保有することにより、自らの置かれた諸状況を判読し、適応を容易にし、場合によっては自己評価を高めることができる。

### 生きにくさをもたらす「自分」

人間には「生命システム」という在り方と、「自分システム」という在り方との二重性が備わっていると述べた。普通はこの両システムは共存しているわけであるが、時に両者の間に隔たりが出来てしまうこともある。

自分イメージ・自己概念を抱くということには、「意識」のはたらきが重要である。特に能動的な意識をはたらかせる際、その高い能力故に、いわば新しい自分像を作り上げてしまうことがある。もちろんそこには情動系のはたらきも加味されるのであろうが、比喩的に言えば、「からだ」と「こころ」の間にズレが生じてしまう。

さらに、私たちに生きやすさをもたらしてくれた、特に社会や共同体というものに所属することの裏側、マイナス面も考えなくてはならない。ひとと一緒とか、ひとと同じということのもつ苦しさ窮屈さのようなものも必ずあるからである。

他者との関係の中に「自分」を維持し「自分」を主張していくこと。社会の中での自分に対する評価を意識することなどを通して、自らの存在理由への捉われが強くなってしまう。自分を持つことの陥穽がそこにある。「自分」を持ってしまったために、自らにマイナスイメージを抱いてしまうと、生きにくさを招いてしまう。

自分に対して分不相応のプラスないし誇大的なイメージを抱いてしまっても、やはり生きにくさが生まれやすい。余程状況やまわりの支えてくれる人たちに恵まれていれば別であろうが、普通は周囲との関係がスムーズにいかず、結果、生きにくさに結びついてしまう。

いずれにせよ、人とは「自分」とのやりくりを施していかなければならないややこしい存在である。しかしまたそこに、人生の醍醐味もあるといえはるのであろう。この「やりくり」の試練を

くぐり抜けた人が、より屈託のない自由な人柄というものに達することができるのであろう。

## 人生に対する態度

「自分（自分イメージ，自分概念）」というものをもったことにより，私たちの一生は，単に寿命をまっとうし，チャンスがあれば子孫を残すということだけにとどまらないものになった。そこに色々な色合いがつけられ，味つけをされることになったのである。

喜こんだり悲しんだり，苦しんだり楽しんだり。怒ったり怖がったり，強がったり見栄を張ったり。誇大的になったり，卑小感を抱いたり。優越感を抱いたり，劣等感にさいなまれたり。人を助けたり，助けられたり。などなど。これが人の一生であり人生であらう。

さて，さまざまな人生が社会を生きている・生きていたわけであるが，それぞれの人たちは，いったい自らの人生のことをどう捉えているのだろうか。私自身は，「日暮れて道遠し」という表現に，若い頃でも現在でも，自らの境遇としてのある種の感慨を抱いている旨先に述べた。もちろんこのひとことが，私の人生を表現し尽くしているわけではない。いるわけではないが，何とはなしに私の在り方を言い当てていることも真実である。

ただし若い頃と現在とでは，その表現に託された私の思いは違うことも確かである。その年頃・その状況と，恐らく人生観とでもいうものは深く関係しているのであろう。特に若い頃とある程度年を重ねた時とでは，人生への向かい方，人生の捉え方は違ってくるのではないか。

以下で，筆者が大学の授業において学生に書かせた人生観と，筆者が高齢者対象の市民講座で出席者に記してもらった人生観とを比較してみよう。<sup>\*</sup>

課題そのものは単純なものであり，

人生とは……………である。

の点線部分を記入させるものである。

- (1) まず大学生の示した回答を列挙する。一応，あいうえお順に縦に並べてある。同じ表現がされている場合，カッコ内にその人数を記した。

愛  
愛に生まれ愛にかえるもの  
与えられた命を懸命に生きること  
後戻りできないもの

その人がもっている運に左右されるもの  
その日，その時をせい一杯生きること  
その人の歴史  
楽しむべきもの

---

<sup>\*</sup> 大学生は20才前後の年齢の者40名（2006年秋），高齢者は70代前後の人たち40名（2007年春）の回答（一人で複数回答したものは除いた）。

## 人生に対する態度

生きていることによって意味があるもの	地球の一部
生きて学ぶこと	常に夢や希望をかなえる為の修行の場
生きること	適当
唄	手品
宇宙	出会い
絆	出会いと別れ
景気	遠回りこそが幸せへの近道
孤独との戦い	時計の針のようなもの
挫折と苦勞の連続	七転び八起き
幸せ	人の意思を超えているもの
幸せを追求すること	勉強
障害物レース	迷路
試練	山あり谷あり(2)
時間つぶし	山を登ること
自己との戦い	夢に向かって生きること
自分の好きなように生きること	

(2) 続いて高齢者の示した回答を列挙する。同じく、あいうえお順に縦に並べてある。

愛を育むこと	心穏やかに
相手を思いやる心をもつことが大切	心と体が健康である
明るく生きる	最終に向かって有終の美を
歩く道	大河に流れこむ小さな川の流れ
生き甲斐	楽しく生きられたら
意気に感ず	動物・動くもの（常に体を動かしていきたい）
一時間	忍耐
思いやり	人と人のつながり
がまんが大事	複雑
感謝(2)	平和にくらすこと
感謝の心	前向きにユーモアをもって明るく
感謝の日々であり、日々挑戦、創造性をもつこと	丸く健やかに生き抜く
希望	道
気楽に生きたい	無
苦あれば楽、楽あれば苦あり	山あり谷あり
苦しみを味わい、楽しみを知る、そして感謝することを知る	山登り
苦樂の連続	譲り合って暮すこと
健康	楽あり苦あり
健康と感謝	楽なことばかりない
元気で楽しく長生き、人に迷惑をかけないで生活していきたい	

以上の両者の記述をもとに、気付いたことを検討していこう。

## 感 謝

大学生の記述をざっと読んだ限りでは、バラつきが大きく、共通の特徴らしきものは感じにくい。他方高齢者においては、ある程度似通った人生観とでもいうものが共有されやすいのであろうか。幾つかの特徴があるように思える。

まず高齢者の記述に目立つのが「感謝」の2文字ではないだろうか。大学生側の表現に、この「感謝」という言葉は見当たらない。高齢者側では、「感謝(2)」、「感謝の心」「感謝の日々であり、日々挑戦、創造性をもつこと」「苦しみを味わい、楽しみを知る、そして感謝することを知る」「健康と感謝」と、全体で40名のうち6名が「感謝」の文字を使用している。

長い人生を歩んできて、「感謝」と素直に振り返ることのできる素晴らしさ。そこには健全な自己肯定・人生肯定が存在するようだ。生き方から余計な力が抜け、ありのままを受け容れようという縛られない心がありそうである。

この「感謝」の言葉に至るまでには、やはりさまざまな経験がその背景にあったものと推察される。それらをひとつひとつ越えてやってきて今の境地がある。その多くが純化され、命あること、生きてきたことへの飾り気のない感謝の心があるようだ。

他方大学生においては、まだ感謝するという余裕がないのであろうか。感謝できるということには、何らかの余裕があることが必要である。自分形成の途上にある彼ら・彼女らは、やはりまず目前に与えられた課題をこなすことで、せい一杯なのであろうか。

例えば、「与えられた命を懸命に生きること」「孤独との戦い」「挫折と苦勞の連続」「障害物レース」「試練」「自己との戦い」「その日その時をせい一杯生きること」「常に夢や希望をかなえる為の修行の場」「七転び八起き」「山あり谷あり(2)」「山を登ること」などにその心境が垣間見える。

もっとも高齢者の側にも「山あり谷あり」「楽なことばかりない」などの記述もあるわけで、大学生だけが余裕が乏しくなりがちというわけでは必ずしもない。見方を変えれば、大学生のほうが今現在「人生」と格闘中という印象もなくはない。それにしても、高齢者の表現には余裕がある姿勢が感じられないだろうか。ひいき目で見ているのかもしれないが。

## 健康・元気

次いで気付いたのが「健康」「元気」という言葉である。高齢者の記述の中に、「健康」「健康と感謝」「元気で楽しく長生き、人に迷惑をかけないで生活していきたい」「心と体が健康である」「丸く健やかに生き抜く」と5人の回答がある。

大学生の記述の中には、直接「健康」や「元気」について触れたものはない。やはり健康の有難さは、

## 人生に対する態度

幾星霜経た後にしみじみ感じられるものなのだろうか。あるいは、長年生きたきた過程で、やはり健康を損ねた辛い経験がいろいろあったのだろうか。

若い時には生命エネルギーに大方恵まれていることにより、たいていの身体的不調は、乗り越えられがちなのか。それとも大学生たちは、健康問題以上に、当面向き合わなくてはならない課題が大きいものとして眼前にあるのであろうか。あるいは、まだ自分が若いという感覚を暗黙の支えに、身体の問題は自ずと解決可能という気構えがどこかにあるのだろうか。

いずれにせよ、高齢者の記述には、長年自分のからだと付き合ってきた、という思いが裏打ちされている感じがする。大学生においては、自らの身体と付き合うという感覚は、まだあまり獲得されていないのかもしれない。むしろからだに心が振りまわされてしまいがちな年頃なのであろう。心とからだがつっくり馴染んでくるには、やはりある程度年月を重ねなければならないのであろう。

## 生 き る

「生きる」という表現を使ったものを、今度は大学生の回答から先に眺めてみる。「与えられた命を懸命に生きること」「生きていることによって意味があるもの」「生きて学ぶこと」「生きること」「自分の好きなように生きること」「その日、その時をせい一杯生きること」「夢に向かって生きること」である。

高齢者の場合は、「明るく生きる」「気楽に生きたい」「楽しく生きられたら」「丸く健やかに生き抜く」となる。

どうであろう。やはり大学生のほうが、生きつつあることの「現役」という感じがしてくる。今まさに諸事態に取り組みつつあるという印象である。

他方高齢者のほうは、良い意味で力が抜けているという感じがする。高齢者として、人生の「現役」であることに変わりはないわけであるが、人生の中心事業は大概為し終えてしまっているということではないか。これからさらに何か新しいものに意欲とエネルギーをもって挑戦するということではどうもなさそうだ。

この両者の違いは、当然といえば当然のことであろう。片や山登りの最中である大学生と、頂上から下山しつつある高齢者の違いということになろうか。あるいは、生きるということに費やすエネルギーの投入の仕方における濃淡の差であろうか。

## 単純化した表現

回答を見ていると、短い言葉で表現しているものが結構あることに気付く。何かそこに、大学生と高齢者の間に違いはあるのだろうか。まず大学生の方から。「愛」「唄」「宇宙」「絆」「景気」「幸

せ」「障害物レース」「試練」「適当」「手品」「出会い」「勉強」「迷路」。

次いで高齢者。「歩く道」「生き甲斐」「一時間」「思いやり」「感謝(2)」「希望」「健康」「忍耐」「複雑」「道」「無」「山登り」。

人数は大学生13名、高齢者13名で同数。短い、単純化した、あるいは比喩的表現をする人の割合は変わらないようだ。

中身についてはどうであろうか。高齢者のほうの回答をざっと読むと、そのほとんどが共感しやすい気がする。ああこの方はもしかしたらこのような生き方をしてきたのではないか、というイメージが浮かびやすい(筆者の年令のせいかな?)。あるいはこの方はこのようなことを大切に生きてきた、ないし現在大切に生きていてるな、という思いが浮かぶ。「無」というのはすごい表現であるが、ある境地に達した方なのかもしれないと思う。

大学生のほうも、もちろん共感可能なものは多い。ただその中で、真意が図りかねるものもある。例えば、「唄」「宇宙」「景気」「手品」などである。無理をして分ろうとすればできなくもないが、それでも見えない部分がかなり残る。

実はこの見えない部分がかなりあるということそのものが、大学生自身の心境でもあるのではないか。近々何らかのかたちで社会参加する立場にあり、その一方で「自分」というものの位置づけや評価が未だ不確定である。自らの人生如何と言う以前に、現在と未来にどう立ち向かい乗り出していくのか、という今抱えている課題の大きさ。

このような境遇にある大学生が、「人生とは?」と問われた際に、自らの内にすっきりとした表現を見つけるのは難しいかもしれない。そもそも年令を重ねた人にとっても、ひと言で人生を表すことは、かなり難しい作業である。ましてや、目の前の課題をこなすことでせい一杯であり、恐らく自分というものに対してなかなか自信を抱けない大学生にとって、この作業は、イメージがわきにくいものなのであろう。

そのような時、「人生」という言葉に対し、身の内にぴったり呼応する言葉は見つかりにくく、結局、抽象的な表現に行き当たってしまう。もちろんでたらめを述べているわけではなく、自らの生きている体験のある部分を強調・拡大したりした結果が、こうした表現になるのではないか。例示はしなかったが、「地球の一部」「時計の針のようなもの」というのもこの類であらう。

「適当」や「時間つぶし」という表現があるが、これも本心から真剣さを回避しようというのではなく、実際には、これからどう生きるのか自らの人生への態度を未だ決めかねている在りようを、それなりに正直に表明しているのではないか。自らの人生を、未だ自らのものとする難しさが多々あるのではないだろうか。

高齢者にとっては、多分大学生よりは自らの人生を簡潔に表現することはたやすいことなのであろう。それだけ自らの内に、生きてきた証しがずっと詰まっており、しかもその全体の色合いが、かなり鮮明になりつつあるものと思われる(色あせてやや単純化している可能性も無きにしも

あらずだが)。

## 同 じ 表 現

大学生と高齢者の回答を見わたして、内容的に同じようなものを指しているものはかなりあるが、同じ表現をしているものは思ったよりも少ない。文字通り同じ表現をしているのは、「山あり谷あり」(大学生2名, 高齢者1名) だけである。ほぼ同じ表現ということに拡大しても、「山を登ること」(大学生) と「山登り」(高齢者) しか見当たらない。

これらはいわばステレオタイプな捉え方でもある。他にこの例としては、「試練」「七転び八起き」「苦あれば楽あり」などがある。年令を問わず「人生とは」と尋ねられると、一定程度こうした回答が出てくるものなのであろう。しかし問われた時に、自分の思いとこれらの表現が、やはりその人の胸の内では出会ったのは確かであらう。ステレオタイプな表現かもしれないが、でたらめを言っているわけではもちろんなく、その人の感慨がその表現に込められていることに変わりはないと思われる。

## 苦 と 楽

山の上り下りが、人生で遭遇する苦楽を暗示しているようだ。そこで「苦」と「楽」の文字が入った表現を抽出してみよう。

まず高齢者。「気<sup>・</sup>楽に生きたい」「苦<sup>・</sup>あれば<sup>・</sup>楽、<sup>・</sup>楽あれば<sup>・</sup>苦あり」「苦<sup>・</sup>しみを<sup>・</sup>味わい、<sup>・</sup>楽<sup>・</sup>しみを<sup>・</sup>知る。そして感謝することを<sup>・</sup>知る」「楽<sup>・</sup>の連続」「元<sup>・</sup>気で<sup>・</sup>楽しく<sup>・</sup>長生き、人に迷惑を<sup>・</sup>かけないで生活<sup>・</sup>していきたい」「楽<sup>・</sup>しく<sup>・</sup>生き<sup>・</sup>られたら」「楽<sup>・</sup>あり<sup>・</sup>苦<sup>・</sup>あり」「楽<sup>・</sup>なことばかり<sup>・</sup>ない」と8名。

次いで大学生。「挫折と苦<sup>・</sup>労の連続」「楽<sup>・</sup>しむべきもの」と2名。

「苦」や「楽」という表現に、大学生などは慣れ親しんでいないのであろうか。2名しかこの2文字を使っていない。もっとも人間が何らかの体験をした場合に、それが「苦」とか「楽」という表現に帰結するのは、それなりの体験の厚味とでもいうものがあることが前提になるのではないか。そしてなおかつ、一定程度の時間を経て初めて、「苦」とか「楽」とかの言葉が実感をもって感じられるのではないか。

中味がぎっしりいっぱい詰まったひとつの言葉(「苦」「楽」)に辿りつき用いるということには、その自らのもつ重層的な体験をひとくりにしつつ、それらにちょっと距離を置いて見、かつ感じる態度が必要だということになる。恐らく高齢者になってからのほうが、そうした態度をとりやすくなるのであろう。

大学生の場合は、体験の厚味がまだ高齢者に比べれば薄いものであろう。日常に「苦」や「楽」

を体験はしていても、それらを束ねて自らの人生を表わすことにまでは至りにくいものと思われる。個々の体験が大学生では結構ビビッドであり、そこに生じる「自分」の振幅が、高齢者よりも大きくなることも多いのではないか。そこで簡単には一語でそれらを表わすことは出来ないことになる。その結果、これは「単純化した表現」のところで述べたことと重なるが、自らの体験を括る際に、抽象的表現を使わざるを得なくなるのではないか。

ところで「苦」「楽」ではなく、「苦しむ」とか「楽しむ」という表現で考えてみると、これらは何も年令や人生経験にかかわらず、用いられる表現になるのかもしれない。高齢者8名のうち3名が「苦しみ、楽しみ」「楽しく(2)」、大学生2名のうち1名が「楽しむ」と表現している。

改めて、年を重ねるほど名詞一語で事態を表現する一種の鋭さや洒脱さが出てくるのかとを感じる。これも年の功というものであろう。

## 幸 せ と 夢

最後に「幸せ」や「夢」を取り上げよう。「幸せ」も「夢」も、当たり前だが、人生において大切なものであろう。ただ「幸せ」はどの年代の人にとっても、その心に重要な位置を占めていると思うが、「夢」については、やはり若い人たちのほうが夢を抱いているのではないか。人は中年以降は、より現実的な生活を大事にせざるを得ず、また少なくとも現実離れした夢は、なかなか維持(表明)出来なくなってくるのではないだろうか。回答を眺めてみよう。

「幸せ」について：大学生では、「幸」せ」「幸」せを追求すること」「遠回りこそが幸」せへの近道」の3名。高齢者についてはゼロ。

「夢」について：大学生では、「常に夢や希望をかなえる為の修行の場」「夢に向かって生きること」と2名。高齢者についてはゼロ。

まず「夢」のほうを先に取り上げ考える。「夢」については大学生のみ言及がみられた。高齢者においては、やはり人生の残り時間を展望する時、夢を見続けるには、その余裕はあまりないのであろうか。それとも生活そのものが、現実まみれに色どられ、夢はかすんでしまっているのであらうか。自分というものの輪郭がかなりくっきりと出来上り、またそれ故に、自分の限界をも見定めることが出来てきているせいであらうか。ちょっと寂しい気もするが。

いずれにせよ「夢」を抱けるというのは、若い人たちの特権なのかもしれない。『青年よ、(今のうちに)夢を抱け』ということになるか。発展途上人である彼ら・彼女らは、人格形成途上であるからこそ、片脚は現実には、もう片脚は夢に置いて前進していかなばならない。

さて今度は「幸せ」についてである。大学生が自らの将来に「幸せ」を希求することは当然であらう。少なくとも、危険や過度の波乱は御免こうむりたいと思うのが自然な感覚である。それが生存を主目的とする個的生き物としての欲求だからである。もちろん欲求を満たすということだけで

はない。作り上げつつある「自分」というものの尊厳を、より高めたいという秘めた意志というものもありそうだ。

これらの点では、高齢者にとっても事情は同じであろう。それにしては、高齢者の側に「幸せ」に言及した人が一人もいないとはどういうことであろうか。「幸せ」と一言で自らの人生を表現するには、いろいろなものがそこに詰まり過ぎているという感覚であろうか。それとも、残された時も含めた上で、自分の人生を「幸せ」と結論づけるのはまだ早いと感じているのだろうか。まさか「幸せ」だと感じている人が、ひとりもないというわけではないと思われるが。

ここでふと気付くのは、先に取り上げた「感謝」という表現である。人生いろいろあってこそその「感謝」の気持・感慨なのであろう。単純に「幸せ」という自らの状態・心境をもっぱら表わす言葉を表明するのではない。「感謝」という表現には、その底に「何かとの関係」があることが含意されている。

これまでにいろいろな事があり、いろいろな関係があり、いろいろな思いがあった上でそれらとの交わりを「感謝」と一括りする。生かされてきた自分があり、生かしてくれたまわりがある、という「感謝」なのではないか。

これから先が大事な大学生の「人生」には、莫とした「幸せ」が求められ、既に大半を終えつつある高齢者の「人生」は、これまで生かされてきたことへの「感謝」の気持で染められる。「人生」のもつ色合いは、やはり年代によっても異なるようである。

## おわりに

幾つかの視点を設け、大学生と高齢者の回答の比較や考察をしてきた。他にもまだ検討する事柄はありそうだが、紙数も尽きてきたところなので、「おわりに」として概観する。

まず言えそうなことは、当たりまえのことになるが、大学生たちはいわば「人生」途上であり、自らが経験してきたことを、簡潔な表現でもってすることはやや難しそうだということである。そのため、今現在強く感じていること、体験しつつあること、突き当たっていること、信じていること、などなどを表明しているものがまずある。そして、あれこれ揺さぶられやすいがために、具体的な表現をすることが難しく、そのため抽象化した、「人生」と一見直接は関係のないような言葉をもってくることもある。

大学生の回答の全体的な印象としては、その答えの広がりが比較的大きく、ひとりひとりが手探りで自らの人生を切り拓いているようだ。全体としての共通トーンみたいなものは、ほとんど無い感じがする。まさにそれぞれが、自らの人生に色づけをしている最中なのであろう。

他方高齢者については、年の功を重ねた結果であろう。ある種の落ち着きと、さらには一種の良い意味での脱力感のようなものが感じられる。なかでも「感謝」という表現が特に印象的であった。

生きてきた軌跡を、「苦」も「楽」も、酸いも甘いも踏まえた上で、この表現に辿りつく境地がある（もちろん全員ではない）。単純かもしれないが、平凡かもしれないが、この2文字に込められた生きてきた証しは貴いものである。生を与えられた、命を授けられた、そして人生を与えられたことへの素直な態度が清々しい。

「生きる」ということには、確かに能動的なことが多く付きまってくるが、受動的に所与の境遇を受け入れ、自らの生きてきた道をそのままに肯定し、そして謙虚に感謝する。他の生物なら死をほとんど意識することもなくその生を終えると思うが、人間は「自分」を持ち「死」を意識する特殊な存在である。

ややもすると、生きていく際に「力」が入ってしまいそうなものだが（存在証明）、晩年に至ってかもしれないが、受動的なところに身を置いて最終のひと時を過ごすということは、なかなか生き物として味わい深いレベルに達しているのではないだろうか。全ては既に与えられているかもしれないのである。

さて、日暮れて道遠し、と感じているということは、もっともっと私は生きなければ、「感謝」に到達しないということか。